

グレン・パタソンのエッセイ 「愛の詩、そして北アイルランド警察と私」

八 幡 雅 彦

A Japanese Translation of Glenn Patterson's Essay,
"Love Poetry, the RUC and Me"

Masahiko YAHATA

はじめに

グレン・パタソン(Glenn Patterson)は1961年北アイルランドの首都ベルファースト生まれの小説家である。1988年のデビュー作『我が身を燃やす』(*Burning Your Own*)は、1969年7月、北アイルランド紛争勃発直後のベルファーストの新興住宅街に住むプロテスタントの少年マル・マーティンとカトリックの少年フランシー・ヘイガンの友情を描いた。しかし、宗派対立のただ中で、マルはフランシーの悲劇的な死に遭遇する。北アイルランド紛争の実態をえぐり出したこの衝撃のデビュー作は、ルーニー文学賞とベティー・トラスク賞に輝く成功を収めた。⁽¹⁾

1992年出版の第2作目の『Fat Lad』(*Fat Lad*)は、ベルファースト出身の青年ドリュー・リンドンが、北アイルランド人としてのアイデンティティーを模索して、イギリス、南北アイルランドの間を彷徨する姿を描いた。メタファーとシンボルを駆使して様々な北アイルランドのアイデンティティーを呈示したこの作品はG.P.A.賞にノミネートされた。⁽²⁾

1995年に出版された第3作目の『ビッグ・サンダー・マウンテンの闇夜』(*Black Night at Big Thunder Mountain*)の舞台は、フランス・パリ郊外のユーロ・ディズニー建設現場である。ここで、ベルファースト出身の建設労働

者レイモンド・ブラックと、ドイツ出身の女性料理人イルス・クレインと、アメリカ出身の青年サムが会う。ウォルト・ディズニーを狂信するサムは、ディズニーが、ミッキー・マウス以前に考案したネズミのキャラクター「モーターイマー」を連れてくることを要求して、レイモンドとイルスを人質に取って立て籠もる。3人は、監禁状態の中で、それぞれ、自分たちの国を去ってユーロ・ディズニーに来るに至った経緯を語り、スリリングなストーリーが展開する。北アイルランドのアイデンティティーを国際的なコンテクストの中で追究したという意味で、この作品は、アイルランド小説史上、画期的なものである。

1999年出版の第4作目『インターナショナル・ホテル』(*The International*)は再び舞台をベルファーストに戻し、今度は、紛争以前、以後という、時代の異なる観点から北アイルランドを描いた。1967年、かつてベルファーストの中心部に実在した「インターナショナル・ホテル」では、悲哀に満ちた人間ドラマが繰り広げられていた。しかし人々は、2年後の紛争の勃発など予想だにせず、明日への希望を抱いて生きていた。それゆえに、紛争によってひとりひとり彼らの命が失われてゆく描写は、悲劇の度合いを強めている。しかし1994年の停戦合意によって物語は希望のトーンで終わる。

そして2003年4月に出版された最新作『ナ

ンバー5』(Number 5)は、パタソンにとっては「5作目」となり、ベルファーストのある通りの「5番地」に立つ一軒家に、1958年から現在まで入れ替わりで住んだ「5つの家族」を描いた。この家に最初に住んだのは新婚夫婦のハリーとステラだった。ステラは外で働くことを望むが、保守的な夫に反対され、苦悩し、彼女が取った行動は……。2番目に住んだのは初老の夫婦ロドニーとマーガレットで、1970年代、一向に収まる気配のない紛争に嫌気がさし、ここを去る。3番目に住んだのは中国人家族で、人種差別に遭う。4番目に住んだエリオット家は、深い宗教心を身につけ、彼らの家を「聖なる家」として人々を招く。その後、5番目に、1990年代初頭から現在にかけてこの家に住むのは、メル、トニーという未婚の男女で、彼らは仕事の上のパートナー同士である。そして45年間に亘って5つの家族と常に関わり続けてきた彼らの隣人アイビー・ムーアがいる。この作品は、彼らの人生ドラマを通して、ベルファーストの変遷の姿を描くと同時に、この都市の「日常性」と「異常性」を顕示している。

「紛争」のみのイメージで捉えられがちな北アイルランドだが、パタソンは北アイルランドを様々な異なる角度から描き、その多様性と可能性を示唆している。彼の現在までの小説の一貫したテーマは、北アイルランド人としてのアイデンティティーの模索であったと言えよう。

パタソンは、2002年10月19日、20日の両日、広島市立大学で行われたIASIL JAPAN (国際アイルランド文学研究協会日本支部)大会に招かれ、“Love Poetry, the RUC and Me”と題するエッセイを朗読した。⁽³⁾このエッセイは、パタソンが10代後半に経験した、彼の価値観に大きな変化をもたらした出来事についており、同時に北アイルランド紛争に対して深い洞察を示している。パタソンの小説を理解する上でひとつの手がかりになるとされるこのエッセイは、もともと1997年、スウェーデンの雑誌の依頼に応じて書かれたもので、1999年にはハンガリー語訳も出版された。⁽⁴⁾またドイツ、ウクライナ、フランスでも翻訳が

出版されたと聞く。⁽⁵⁾ここに、著者パタソンの許可を得て、日本語訳を発表する。

「愛の詩、そして北アイルランド警察と私」

17歳の時、私は40回目か50回目の恋に落ちた。それは5月のある土曜日の夜のことだった。その日の午後、私は、ベルファーストのウィンザーパーク⁽⁶⁾へ行って、毎年恒例のように、イギリスサッカー選手権で北アイルランドがイングランドに敗れるのを観た。試合は午後3時キックオフだった。私は朝11時からパブで飲んでいて。私は、北アイルランドのユニフォームを着て、パブから競技場に行く途中で友人から北アイルランドの旗を借りて、両肩に巻いた。北アイルランドのサッカーチームを応援するのは、常にプロテスタント特有の娯楽だった。

それは、北アイルランドが0-2で負けた年だったか、1-5で負けた年だった。⁽⁷⁾いずれにせよ、私が言ったように、北アイルランドは毎年負けているように、負けた。

私は5時半に試合から家に帰り着いた時、まだ酔っていた。私はベッドにもぐり込み、10代の北アイルランドサポーター特有の、不機嫌で、深い眠りについた。母が私を7時に起こした。私の友人たちが正面玄関に来ていた。その日の夜、マローン・ロードにある教会のホールでディスコパーティーがあった。⁽⁸⁾そこは、私たちの住んでいる団地から約1マイル半離れた、ベルファースト郊外の高級住宅街だった。1979年のことだった。北アイルランド紛争は10年続いており、ベルファーストからは夜の娯楽はほとんど消え失せていた。私の友人たちも私も、日が暮れてからは滅多に街の中心部に足を踏み入れることはなかったが、週末の夜は、親たちが晩方出かけて不在の家で、酒を飲んだり、トランプ博打をしたり、ホラ話をしたりして過ごした。時には私たちはガールフレンドを連れて来て、明かりを消して、念入りにキスを交わし合った。私たちのデート相手の娘たちは、皆、私たちと同じ団地に住んでいた。私が17歳になる時までには、すべての少年たちがすべ

ての少女たちと相手を変えてデートしていた。私の友人たちと私はいつも、「いまにベルファーストの違う場所に住んでいる女をナンパしようぜ」と誓い合っていた。マローン・ロードのディスコパーティーは、その夢を叶えてくれそうな場所だった。その5月の晩方、私がベッドで身を起こすと、正面玄関の方からブルート⁽⁹⁾の匂いがプンプンしてきた。

私は機嫌が悪かった。北アイルランドが負けたからだ。私たちは、皆、パブでイングランドを負かす歌を歌っている時でさえも、北アイルランドが負けることはすでに分かっていたのだが。私たちは再び酔うつもりだった。そして、「今夜こそ、違う場所に住んでいる女をナンパするチャンスだ。でも、結局はどのマローン・ロードの女とも口を聞くことなくディスコを去ることになるだろうな。ええい、女と踊れなくなっちゃって、キスができなくなっちゃってかまうもんか」と自分たちに言い聞かせていた。しかし、心の中では、私たちは皆、そうできなければ悔しがることは分かっていた。

私は、どうして最終的にベッドを抜け出して行く気になったのか分からない。たぶん、北アイルランドが負けても負けても、私がウィンザーパークへ行き続けたのと同じ気持ちだった。

そして私は起き上がって友人たちと出かけ、ディスコへの道すがら、缶ビールを飲んで酔い、女の子たちとは誰ひとり踊ることなくディスコを去った。しかし、この時ばかりはれっきとした言い訳があった。私たちのグループのうちの幾人かと、私たちと同じ下心を持ってマローン・ロードへやって来ていた他の団地の少年たちとの間で喧嘩が起きたのだ。大した喧嘩ではなかったが、とにかく管理人は音楽を止めて、警察を呼んだ。私たちが皆外に出た時、2台の装甲車が教会の門をくぐって止まっていた。そして制服警官たちが、私たちの中に「札付きのワル」はいないかと、顔をジロジロ見回した。

11時を少し回っていた。シティーセンター発の最終バスはすでに通り過ぎていた。私の友人たちと私は、家まで歩いて帰るのに30分から40分かかった。もし近道するとすれば、私

たちと同じプロテスタントで、私たちの喧嘩相手たちが住む団地を通り抜けねばならなかった。しかし、こんな日の夜はどの道を帰ろうがほとんど関係なかった。警察が警戒していて、酒を飲んでいそうな者は、一人残らず家まで引っ張って行くという噂が流れていた。(ディスコに来ていた者たちは誰ひとり、まだ酒が飲める法廷年齢に達していなかった。) 私にとっては、一度家まで引っ張って行かれることは刑罰を避けるために支払う小さな代償のように思えた。私は教会の前の舗道で、まだウロついている二十歳以下の連中の足もとで、そして息子たち、娘たちを連れに来たマローン・ロードに住む親たちの足もとで、酔いつぶれた振りをして寝そべっていた。

警察は私を無視した。私の友人たちも私を無視した。私は完全に足が立たないわけではなかったかもしれないが、いずれにせよまだ酔っていた。私は目を閉じ、再び目を開けると、この世で最も美しい娘がじっと私を見下ろしていた。地面から、私は特に誰にともなく語りかけた。「これこそ俺が愛する娘だ」とすると娘は微笑み、ますます美しくなった。そして私はすっかり参った。私のハートはメロメロになった。

数日後、学校で別の娘が私に近づいて来て、電話番号を手渡した。それは、私がディスコの外で出会った娘の電話番号だった。彼女は私と同じ学校に通っていることが分かった。⁽¹⁰⁾ どうして私は、以前、彼女に出会うことがなかったのだろう。それは生徒数2千人以上の学校で、その娘は — 彼女をMと呼ぶことにしよう — 最近、他の学校から転校して来たばかりだった。しかも、その時、私は第6学年で、彼女はまだ14歳だった。

Mはまたカトリックだった。あるいは、少なくとも、カトリック教徒として洗礼を受けていた。つまり、彼女はただ洗礼を受けていただけだったのだと私は思う。彼女は、宗教に関しては極めて無関心で、14歳にしては極めて懐疑的だった。もし私が「彼女は私が最初に出会ったカトリックだった」と言えば、美談になるだろう。しかし、実のところ、私が子どもの頃か

ら、ベルファーストでは宗教の融合は、特に私が生まれ育ったような新興住宅街では、珍しいことではなかった。近隣の家族の多くはカトリックだった。私の、くっついたり離れたりの親友(すべての子どもたち同様、わたしたちは決まって喧嘩をしては仲直りしていた)は、カトリックだった。さらに、私自身の親戚のうちには田舎に住むカトリックのいとこたちがいた。これも珍しいことではなかった。異宗教間同士の結婚の証を見つけるのに、プロテスタントでも、カトリックでも、多くの家族の歴史をそんなに昔まで遡る必要はなかった。ホルモン(性衝動)が人間の頑迷さを取り払うのだと私は思う。

学校の廊下に立って、Mの電話番号を握りしめて、私自身のホルモンが騒ぎ立てていた。彼女は、私が最初に出会ったカトリックではなかったかもしれないが、私に「電話を欲しい」と言った最初のカトリック(確かに最初で最後の女性)だった。

私は電話をして、私たちは会った。そしてほぼ4年間付き合った。

もちろん、Mが宗教に対して、鷹揚な、むしろ不遜とも言える態度を取ることができたのにはひとつの重要な理由があった。彼女の家庭は裕福だった。彼らが住んでいる通りは、マローン・ロードの真髓のような場所で、殊の外垢抜けていて、車の通り抜けさえなかった。一軒の家が売りに出された時、住民たちはどんな人間が買うつもりなのかと調べるために集まった。彼らは、買い手の宗教よりも社会的地位を気にした。

私の住んでいる団地では、紛争が起きてから10年の間に、数多くの近隣のカトリックの家族が去っていた。公然と脅迫を受けて去った家族もあれば、絶えず緊張状態の中で暮らすのが嫌で去った家族もあった。そして、彼らの後には、多くの場合、カトリックが多数を占める団地を去ってやって来たプロテスタントの家族が代わりに住んだ。ベルファーストの中で、もっと人口が密集した地域では、「寛容さ」は締め出されていた。いったいなぜこのようなこと

が起きているのかと疑問を差し挟む余地はほとんどなかった。

Mの邸宅はかなり大きかったので、私たちは家の中から見られることなく庭で愛し合うことができた。そして家の中で愛し合っている、見つかることがなかった。私よりも3つ年下だったが、Mはあらゆることに対して、「当然のごとく」疑問を発した。彼女は、私がかつて聞いたことがないような方法で、ロイヤリズムとリパブリカニズムの急進派を愚弄した。⁽¹⁰⁾彼女は、集団に迎合するだけの人間を、誰もかもボロクソに言った。彼女に初めて出会った夜私が一緒にいた連中とは、私は1ヶ月以上付き合うのをやめていた。(私は北アイルランドのサッカーの試合を見に行くのはどうしてもやめることができなかったが、Mと知り合ってから以来、北アイルランドの旗がたなびき、相手チームを誹謗する歌ががなり立てられているゴール裏のサポーター席は避けるようになった。)私の新しい友人たちは、北アイルランドに関して対立する2つの忌々しい主義主張よりも、「ザ・クラッシュ」⁽¹¹⁾に興味を持つ人間たちだった。

私は創作を始めた。主に愛の詩だった。私はMに出会う前からモノ書きになろうと考えていたが、それは、私が住んでいる場所では公然と口にできるようなことではなかった。Mは、私の最初の努力の結晶に微塵の感動も覚えなかった。「ひどく退屈、ひどくおセンチ、単なるクズよ」と彼女は言った。そして彼女の言うことは正しかった。政治においても、創作においても、私は他人の意見に頼る癖があった。彼女は、どんな教師よりもためになることを私に教えてくれた。

私は18歳で学校を終えたが、大学には行かないことに決めた。(大学とは私にとってはイギリスを意味し、故郷を去ることが大学行きの魅力の大半だった。)Mは学校が後3年残っていたのだと思う。私は書店で働き始め、なぜそんな名を付けたのかは聞かないで欲しいのだが、『もう1羽のアヒル』(The Alternative Duck)という詩の同人誌を始めて、失敗した。

私は、その頃はまったく地元の友人たちとは会わなくなっていた。私の新しい友人たちはほとんどがイギリスの大学へ行っていた。私はますます多くの時間をMと過ごすようになった。物事はいつも容易ではなかった。激しい喧嘩があり、涙の和解があった。彼女の父親は、私たちの関係の強烈さを心配して、1度ならず彼女が私と会うことを禁じた。私は食事がノドを通らなくなり、宵のうちまで眠ることができず、孤独に酒を飲んでいた。

私はMを心の底から愛した。そして彼女の手の届かぬ所まで行ってしまいたいと夢見た。

彼女が住んでいる人目につかない通りの住民のうちには裁判官たちがいた。ベルファーストという土地柄ゆえ、これらの裁判官たちは24時間体制で警察の見張りをつけていた。Mの父親から交際禁止令が出ていた間のある夜、私が彼女の家に通じる長い車のアクセス道と並木道が接するあたりをウロついていると、1台の警察の装甲車が止まった。助手席の警官が私に、「道に迷ったのか」と尋ねた。私は、「ガールフレンドを待っているんです」と答えた。警官は私に、彼女の家を指差すよう命じ、そして「その娘の家族はおまえのことを請け合うか」と尋ねた。私は、「はい」と答えたが、すぐに「いいえ」と言い直した。そして私は交際を禁じられていることを、もしMが私と会うためにこっそり抜け出して来るのを彼女の父親が見つけたらどんなに怒るかを説明した。警官は私を疑わしげに見た。彼は私に、「装甲車の後ろに來い」と命じた。後ろの席には別の3人の警官がいた。彼らは私の名前と住所を書き留めた。彼らのうちのひとりが、私がメモ帳を持っていることに気づいた。そして「見せろ」と言った。メモ帳というのは怪しい持ち物だ。メモ帳には、裁判官たちの家の詳細や、彼らの車の車種やナンバーや、自動開閉式のゲートを出入りする警官たちの動きが記載されているかもしれない。私はメモ帳を手渡した。警官はページをパラパラとめくった。

「これは一体何だ」彼は私に尋ねた。

「詩です」と私。

「おまえが書いたのか」

私はうなずいた。警官は微笑んだ。

「じゃあ、おまえは詩人なんだな」

「まあ、そんなもんです」と私。

「よし、分かった」もうひとりの警官が言った。「おまえの詩を読んで聞かせろ。そしたらおまえを家まで送ってやる」

私は、この時も最終バスに乗り遅れていた。Mと知り合った頃は、家に歩いて帰るのは決して快適なことではなくなっていた。私は装甲車に乗り込んだ。

「詩人のために静粛に」警官のひとりが言った。

私は、ある詩の、今にも忘れそうな2、3行を口ごもりながら読んだ。私自身、その時読んでいる詩の名前を覚えていなかったかもしれない。

「前の席に聞こえないぞ！」助手席の警官が叫んだ。「もっと大きい声で読め！」

「立て」運転手が言った。

警察の装甲車は、中で立ち上がれる作りではない。私は肩のところで前屈みにならなければならず、鎖骨が車の天井に当たった。私に向かって懐中電灯が照らされた。

「その方がいい」警官たちは言った。「もう一度最初から読め」

かくして、警察の装甲車の後部座席で猫背になりながら、ベルファーストの最高級住宅街のうちのひとつで、私は、人生最初でただ1回だけの詩の朗読会を5人の聴衆に向かって行った。

私は2つの詩を読んだ。そして私が読み終えた時、警官たちは拍手した。

「意味は分からないが」彼らのうちのひとりが言った。「良い詩のような気がする」

実のところ2つともひどい詩だった。私は、心の中では、私の詩はどれもひどいと思っていた。それでも私は家まで送ってもらえた。

このことがあってからしばらく後、私は再び夜遅くMの家から歩いて帰っていた。当時、一般に受け入れられていた知恵は、もし決まって夜遅くひとり歩きするのならば、同じ道は決し

て通るなということだった。この夜、私が選んだ道は、大部分、街灯で明るく照らし出されていた。しかしその道は、ある一地点で、西ベルファーストのナショナリスト地区であるアンダーソンズタウンに通じる道路の交差点と接していた。私は、この交差点付近を何事もなく通り過ぎることができた時はいつもホッとした。この日の夜、私がこの交差点に近づいた時、1台の車が信号機よりもアンダーソンズタウン側寄りに停車しているのに気づいた。中に4人の男が乗っていた。私は、無関心を装って、彼らの前の道路を横切った。しかし、私が50ヤード⁽¹²⁾も行かないうちに信号の色が変わり、その車が私の後に付いてくる音が聞こえてきた。私はすぐ近くの家の車のアクセス道に逃げ込み、その家の裏に素早く身を隠した。車が止まって、ドアが開く音が聞こえた。車のアクセス道でヒソヒソ声と足音がした。私は家の裏の壁に張り付いて立っていた。庭の突き当たりには高い木のフェンスがあり、私は、どうしたら簡単に乗り越えられるか、頭の中で考えていた。ヒソヒソ声がしなくなった。しばらくして、車のドアが閉まり、車が立ち去るエンジンの音が聞こえた。私はもう1分ほど待って、再び来た道に出た。すると車が、道路の百ヤード先の、私が行かねばならない方向に止まっていた。私が姿を現わしたとたんにヘッドライトが点灯し、エンジンがかかった。私は踵を返して、約400メートル先の、Mが住んでいる通りに向かって逃げた。私はその車から逃れることはできないと観念したが、私がその車を初めて見た交差点まで来た時、それは突然左折して、アンダーソンズタウンの方に走り去った。私は立ち止まって、その車の後ろ姿を見たが、あまりにも安堵して、当惑する余裕さえなかった。その時初めて私は、その車に乗った4人が見て逃げたもの、すなわち警察の装甲車が道路の先からこちらに向かって来るのに気づいた。私は身を乗り出して、両手を振って、彼らに合図した。

私は再び家まで送ってもらった。装甲車のラジオで、その謎の車は、その日の夜の早い時間帯に盗難にあったものだというニュースを聞いた。

た。その車は、後に焼き捨てられているのが発見された。警察は私に、「これから先は夜ひとり歩きするんじゃないぞ」と言ったが、そう言われる前に私はその決心を固めていた。

この出来事が私に北アイルランドを去る決意をさせたなどと言うのは、あまりにも都合の良い話だ。実際、誇張した嘘になるだろう。それは、当時、私が経験した数多くの恐怖のうちのひとつに過ぎなかったが、北アイルランドを去りたい、一刻も早く去りたいという衝動は日に日に増していた。

私は、もし私がMなしにイギリスへ行ったら、私たちの関係は続かないだろうということは分かっていた。彼女も同様のことを言った。しかし、真実を告白するのならば、Mと別れることもひとつの魅力になり始めていた。彼女の家の周囲の雰囲気はあまりにも他のベルファーストとは例外的で、かけ離れたものになっていた。私は、私が生まれ育った社会と政治的に袂を分かつことによって、私は空想の上でもそこから決別していた。誤ったことに、私は、遠く離れたところに、すなわちイギリスに行くことによってのみ、新しいものの考え方ができるのだと勝手に決めてつけていた。

私は、1982年10月にベルファーストを去った。その時、私は21歳だった。1年後、私は、さほどドラマティックではない、41回目か51回目の恋愛をした。私は、私が生まれ育った団地を舞台にした小説を書いた。⁽¹³⁾Mは、その時、ロンドンの美術大学に通っており、その本を読んで、「一番良い部分は私との交際から生まれたのよ」と私に言った。

以来、私は詩を1行も書いていない。

現在、私は、もし夜遅く帰宅するのならば、タクシーを拾うことにしている。

(注)

(1) ルーニー文学賞 (Rooney Prize for Literature)は、1976年、アイルランド系アメリカ人実業家ダニエル・M・ルーニー (Dr. Daniel M. Rooney) によって創設され、40歳以下のアイルランド人作家の出版作に対して与えられる賞である。ベティー・トラス

ク賞 (Betty Trask Prize) は、故ベティー・トラスクによって創設され、英連邦諸国に住む35歳以下の作家のデビュー作に対して与えられる賞である。

- (2) G.P.A.賞は、Guinness Peat Aviation Awardの略である。この時の受賞作は、John McGahern, *Amongst Women* (1990) であった。
- (3) この時のIASIL JAPAN大会は“Crossing Borders”というメインテーマで行われ、パタソンはアイルランドの詩人マシュー・スィーニー (Matthew Sweeney, 1952-) と共に、ゲストスピーカーとして招かれ来日した。パタソンは、このエッセイを10月21日にも広島市立大学の学生たちの前で朗読した。

なお、1998年4月に締結されたベルファースト和平合意 (Good Friday Agreement) の取り決めにより、2001年11月4日、北アイルランド警察の名称はRUC (=Royal Ulster Constabulary) からPSNI (=Police Service of Northern Ireland) に改められた。
- (4) スウェーデン語訳は、“Kärlekspoesi i polispiket”, .doc (1997) である。

ハンガリー語訳は、“Szerelmes versek, a RUC és én”, transl. by Árpád Mihály, *Nagyvilág*, 9-10 (1999), p.723である。
- (5) これらの国でも翻訳出版されたことは、パタソン自身から聞いた。
- (6) ウィンザーパーク (Windsor Park) は、ベルファースト南部にある北アイルランドの国立サッカー競技場である。また、北アイルランドサッカーリーグ (Irish Football League) に属するリンフィールドFC (Linfield FC) のホームグラウンドでもある。
- (7) 実際には、1979年5月19日、北アイルランドはイングランドに0-2で敗れた。
- (8) マローン・ロード (Malone Road) 沿いのこの教会の名は、St. Jones Churchである。パタソンが当時住んでいたのは、ベルファースト南部のFinaghyで、1マイル半は約2.4キロである。
- (9) ブルート (Brut) は当時流行していたアフタシェイブローションで、ここでは、パタソンを誘いに来た少年たちが顔に塗っていた。
- (10) この学校の名は、Methodist College Belfast (1 Malone Road, Belfast) である。1865年に創設された男女共学の学校で、日本の小学校に当たる preparatory schoolと、中学・高校に当たる grammar schoolの2つから成る。当時、パタソンはgrammar schoolの最上級学年 (第6学年) で、14歳のMは第3学年であったと思われる。
- (11) ザ・クラッシュ (The Clash) は、1970年代後半から80年代にかけて一世を風靡したロンドン出身の4人組のロック・バンドである。アルバムとして、*The Clash* (1977), *Give 'em Enough Rope* (1978), *London Calling* (1979), *Sandinista!* (1981), *Combat Rock* (1982), *Cut The Crap* (1985) などがある。
- (12) 1ヤードは91.4センチ。したがって50ヤードは約

45メートル。

- (13) デビュー作*Burning Your Own* (1988) を指す。

(本稿は平成15年度日本学術振興会科学研究費助成に基づく研究成果の1部である。)